

京中生に インタビュー

2016・第3回

もうすぐ夏休み！ 今年は何を読もうかな？
<編集部>

小出 紗羅さん(2年)「少年少女飛行倶楽部」 坂本 明莉さん(3年)「14歳の水平線」

——この2冊、どちらもおもしろかったです。おもしろい本を見つければ、もう読書感想文の半分は書けたようなもの…ということの典型例ですね。

小出 読書感想文に使う本を探しに湧学館に行ったら、この本の表紙が目飛び込んできました。

——中学生、空飛んでますね。

小出 「究極的には、理想を言えばピーター・パンの飛行がベストである」って、正直「そんなの無理でしょ」と思う一方、「本当に空をとんじゃうのかな？」と気になってしまいました。

坂本 私も湧学館で見つけました。私と同じ14歳の男の子の話で、書きやすいかな…と思ったからです。

——今日のインタビュー、お二人にお願いしたのは、どちらの本も「中学2年・男子」の生息を描いているという共通点があったからです。

『少年少女飛行倶楽部』なんかすごいですね。「世の中で一番馬鹿な生き物は、中二男子」って書いてあるところでは大笑いしてしまいましたよ。

小出 齊藤部長も中村先輩も型破りの「中二男子」ですが、この二人がいるからこそ、新入生の佐田海月、海月(みづき)ちゃんの個性が光ると思います。はじめは幼なじみの大森

樹絵里(じゅえり)に引きずられて入った飛行倶楽部なのに、いつのまにかクラブの中心人物になっていたりするところが海月ちゃんの大きな魅力です。「スーパー星川」での職場体験学習の話もおもしろかったし。

——『14歳の水平線』の方も「中二男子」であふれかえっていますね。

坂本 天徳島の四泊五日キャンプに参加する加奈太たち6人に加えて、加奈太の父親・征人の時代の話も含めると計10人の「中二男子」が動きまわる小説ですからね。

——でも、おもしろかった！ あさのあつこ以来、久しぶりに「十二歳」や「14歳」をきっちり描ける実力のある作家が出てきて私はうれしいです。

坂本 今の中学生をとりまいている何てことない日常感覚、例えば「父のことをなんと呼ぶか」とか「読書感想文が苦手だ」とかに混じって、急に「肉体がなくなったあと、自分はどこに行くのだろう」みたいな深い感情も描かれたりして、そういう混乱(←小説では「中二病」といってます)のいくつものに、なんか「わかる！」といった気持ちがありました。

——けっこう気まじめに「死」とか「友情」を書くんだよ。大人になると、照れてしまって、こういうことを口にしなくなるんだけど。

——ところで、最近読んでいる本って、ありますか？

坂本 私は『5分後に意外な結末』というシリーズ本を読んでいます。一つ一つの話が締まっていて楽しいです。

小出 私は『王様ゲーム』のシリーズを読んでいます。

——へえ。『王様ゲーム』は、もうかなりの冊数になるでしょう。

小出 はい。本だけで8冊を越えますが、お兄ちゃんが友だちと集めているので、それを読ませてもらっています。

——私は、この「京中生インタビュー」が終わったら、椰月美智子さんの本の固め読みに入るつもりです。それくらい、おもしろかった。



グライナー オリビア 咲さん(2年)「ワンダー」 新谷保人(湧学館司書)

新谷 『ワンダー』は去年度の読書感想文コンクール受賞作の中でもいちばんの収穫でした。いい本に出会うことができました。オリビアさんは、どうやってこの本を知ったのですか？

グライナー お母さんが買ってきた本です。家にあったのを先に私が読んでしまいました。

新谷 本もすばらしいけれど、感想文も負けずいい。論理展開がすごいです。まず、「私は、人間はよく差別をしていると思います」という仮説を一つ出す。そして、「私にも差別をした経験があります」という実証と「また、差別をしなかった経験もあります」という実証の両方を出す。そこから、この本の主人公「オーガスト」という命題の検証に入っていく文章構成は見事です。かっこいいと思いました。

グライナー 『ワンダー』の最後のページを閉じた時、「オーガスト、私はあなたの友達だよ」と、そう心の中で叫びました。

新谷 その最初の強い気持ち、論理的な構成のおかげでそのままこちらにも正確にパーンと響いてくる文章です。

グライナー この本の一番おもしろいところは、「オーガスト」を、当人のオーガストの目線だけではなく、姉のオリビアや、友達のジャックやサマーの目線からも描いていることです。オーガストをいじめたり怖れたりする人間たちの目線も含めて、一つの事でも、人それぞれの考え方や受け止め方に違いがあることを自然に表現しています。

新谷 オリビアさんが気になった登場人物はいましたか。

グライナー 私は、サマーにとっても似たものを感じました。

新谷 先生方に「友達になってあげて」と言われなくても、ごく普通にオーガストの友達になった子ですね。

グライナー オーガストが特別な人間だから友達になるわけではない。みんなと同じ人間だと思うからこそ私は自然に友達になれるというサマーの生き方はかっこいいです。

新谷 そうですね。あと、私は、姉の友達ミランダの生き方もおもしろいと思いました。サマーとはちがって、自分で経験し挫折し学習し克服して行く中で自分を見つけてゆくミランダの成長に共感があります。

グライナー この本を読んでいる時、何度もオーガストの顔を想像しました。でも、最後に読んだ時、私はオーガストの顔をもう想像していませんでした。オーガストは、何度も無視をされ、差別をされ、いじめられてきました。でも、オーガストはいつも前向きにがんばっていました。私は、そんなオーガストの性格が好きになっていったのです。そして、私もそんな人になっていきたいと思いました。

新谷 「私は、オーガストのことが好きです。たとえ顔がわからなくても。」という結びの言葉、見事でした。



佐古岡駿くん(3年)「日本のいちばん長い日」 新谷保人(湧学館司書)

新谷 映画『日本のいちばん長い日』、観ました。湧学館でもDVDを発売していたんですが、なかなか届かなくて。ぎりぎりでご間に合ってよかった！

中学2年生が『日本のいちばん長い日』で読書感想文を書いたと聞いて、たいへんビックリしていました。大学生でも、正確に読みとるのは難しい超・硬派の本ですからね。

佐古岡 僕の場合は、「戦後70年」だった去年、公開された映画『日本のいちばん長い日』を観たのがきっかけです。その影響で原作を読んでみようと思いました。

新谷 本からスタートするしか方法がなかった世代にはうらやましい話です。佐古岡くんの読書感想文を読んで、そうか！そんな方法が今はあるんだといたく感心しました。

佐古岡 「いちばん長い日」とは、1945年(昭和20年)8月14日正午から、天皇の玉音放送が始まる15日正午までの24時間をさします。ポツダム宣言(つまり日本の無条件降伏)の受諾をめぐって、戦争の終結を考える鈴木貫太郎内閣の思惑とか、本土決戦を叫ぶ陸軍の若手将校たちの思惑とか、その間に挟まれた阿南惟幾(あなみ・これちか)陸軍大臣の思惑とかがぶつかり合う、見ようによってはクーデター、宮城事件ともとられかねない日本史上の大事件です。

新谷 映画はかなり忠実に本を再現していましたね。天皇は「阿南」を「あなん」と呼ぶとか、無条件降伏のデマが出まわりはじめて14日の段階で陸軍省でさえ兵士たちの集団

脱走が起こっていたとか、よくそんな細かいところまで映像化したなあと感じ入りました。

佐古岡 最後の放送局での玉音放送をめぐる場面はフィクションですね。

新谷 そうですね。映画的には、ラストに玉音放送が流れてあの戦争が終わったという形で締めくくらないといけないからでしょう。それにしても、電源の落ちた真っ暗闇の放送スタジオの中での叛乱将校・畑中健二少佐のアジテーションにはちょっとしびれました。あれは、映画ならではの演出ですね。

佐古岡 本の中で心に残った言葉が二つあります。一つは「私の任務は祖先から受けついで日本という国を子孫に伝えることである」という昭和天皇の言葉。二つ目は、「軍をなくして国を残す。日本は滅びるものか」という阿南陸軍大臣の言葉です。ふたりの、将来の日本への想いが分かって心に残りました。

新谷 去年の「戦後70年」。新聞もテレビも出版界もかなり熱心に取材・報道を組んでいましたけれど、その背景には「80年の時には、もう戦争を語る人はほとんど残っていないだろう…」という切迫感があったそうです。

佐古岡 これからも、いろいろな本を読んでいきたいと思います。



京極読書新聞 は
毎月1日発行予定です

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>

